

# 女・子どもものの江戸（その三）

本田 和子

## ◆ 浮上する「子どもの遊び」

小さい人たちが、保護と養育の対象とされ、愛撫にふさわしい存在へと範疇化されていく動きは、この時代の様々な言説に如実に反映されている。たとえば、伝統的な宗教行事が子ども中心のそれへと変容していく動きを追ってみても、そこから、「子どものため」という教育的・啓蒙的な意味づけが日を追って濃くなっていく姿が、はつきりと浮かび上ってくるだろう。

遊びもまた、例外ではない。大人と子どもの区別なく、人間一般のものであった遊びが、分解されて「子どものもの」という冊いに入られると、教育的な意味を

採るまなざしが、俄かに活発になる。「子を捕う子捕う」という遊びをめぐる記述は、それを物語る典型的な例と言えそうである。

「子を捕う子捕う」とは、子どもたちが従いつながって鬼と向き合い、鬼は列の一番後の子どもを掴まえようと、列の先頭の子どもが親となって両手を拡げて後の子どもをかばいながら、鬼に奪われまいと逃げ廻る遊びである。最近は余り見られなくなったものの、十数年前までは、校庭や町の空地を賑わした伝統遊戯の一つであった。

この遊びは、驚くほどの文献記録に恵まれていて、現

に見出されているものでも、平安時代まで溯ることが出来る。とされている。そこで、とりあえずは、その記録の幾つかを紹介することから始めよう。

◆ 「子を捕う子捕う」超源譚

国文学者の佐竹昭広氏は、その最も古い現われを『作庭記』に見ている。その中に、次のような一節があるという理由である。

風石を立る事は、にぐる石一兩あれば、をふ石は七八あるべし。たとえば童部のとて、うく、ひふくめといふたは、むれをしたるがごとし。

右の文中の「とてうくひふくめといふたはむれ」というのが、「子を捕う子捕う」の遊びのこと。この遊びは、古くは「比比丘女」と呼ばれて、「とちょうとちょうひふくめ」などと唱えながら、遊ばれるものであったらしい。「とちょうとちょう」とは「取りてむく」の

音便形。「取りてむ——取ってむ——トテム——トテウ」を変形したのであるかと考えられ、「取るう」という意志の表明とされている。

ということ、『作庭記』の編者とされている橋俊綱（一〇二八〜九四）の時代に、既にこの遊びが遊ばれていたということになる。以後、「比比丘女」の記録は、鎌倉時代の『名語記』、室町時代の『三国伝記』と続くことになるのだが、ここで、私が特に注目したいのは、『名語記』『三国伝記』に記された地藏菩薩縁起譚のことである。その概略は、次のようであった。すなわち、地藏菩薩が地獄から罪人を救い出して連れ帰る途中、追いかけて来た地獄の獄卒と「奪い返そう」「奪い返されまい」とわたり合った。獄卒が、「取るべし取るべし、比丘、比丘尼、云々……」と叫び、菩薩は「上を見よ、頗梨鏡、下を見よ、頗梨鏡」と訓して、罪人らを護り導いたというのである。「はりのかがみ」をよくく見るなら、罪多き衆生といえども、一つぐらい善を働いている筈だから、救い出すに値いするということであろう。

この故事にちなんで、地藏菩薩の慈悲深さを伝えるため、作り出されたのがこの遊び、すなわち「比比丘女」だということなのだ。

ことからの真疑は、ここでは問わない。私は、子どもの遊びが、すべて信仰的な起源を持つとは考えないし、また、そのために意図的に作り出されたとも考えにくいから、恐らくは、事実ではないと思っている。しかし、鎌倉期以降、この「比比丘女伝説」が大切に伝承され、とりわけ、江戸中期以降、改めて脚光を浴びさせられて、華々しく喧伝されるその経緯に、限りなく興味を抱かされるのだ。

以前も触れたように、江戸中期以降、子どもをめぐる言説が活発化し、子どもの風俗や遊びなどが記録され、考証され始める。風俗事典や随筆の中に、「児戯」などという項目が設けられ、子どもの遊びが、しばしば絵入りで説明されているのは、その端的な証と言えよう。そして、それら記録類が、必ず取り上げた遊びの一つが、この「子を捕う子捕う」であった。中でも、山東京伝

(一七六一〜一八二六)の『骨董集』と題された随筆集の「比比丘女」の項は、後の諸本の範とされたという意味で、見落とすことが出来ない。それは、次のように書き出されていた。

今童遊びに、子とろくといふ事をすめり。これいと古き事なり。古へは比比丘女といへり。その原は、恵心僧都經文の意をとり、地藏菩薩、罪人をうばひ取給ふを、獄卒取かへさんとする体をまなび、地藏の法楽にせられしより始めるといへり。

そして、以下に『三国伝記』巻八の第二六条の「比比丘女起源説」を引用し、最後に次のような一文を付けて結んでいる。

〔割書〕かゝれば童遊びの子とろくは、此比々丘女よりいでし事なり。此書は永享三年になれるものなれば、いとふるし。永享三年より、今文化十年

まで、およそ三百八十三年なり。とにかくに童わらわの遊あそびには、ふるき事のこれり。しかもその原もとをたづぬれば、いはれある事ぞおほかる。

京伝は、こうして、この遊びの古さと由緒正しさを強調しつつ、一柳斎に描かせた挿絵を添えることで、伝説の衝激力をより高めようと試みた。すなわち、地獄の鬼と渡り合うのは錫杖を持った地藏菩薩、その後には白装束の亡者たちが連なり、最後尾には、髪を芥子坊主にそった幼い子どもの姿も描き込まれている。恐らくは、この画像のインパクトもあってか。京伝説は多くの好事家に継承された。近代以降の研究者たちまでも、一応は、この「比比丘女起源伝説」を無視し得ず、これをふまえてこの遊びを説明しているほどだ。そして、この、京伝以降の、より正確には『三国伝記』以降の、というべきかも知れないが、「比比丘女伝説」継承の経緯は、子どもの遊びが、人々の認識野に掬い取られて位値を与えられる際の、典型的なありようを物語る例と考えられて、

限りない興味をそそられる。

#### ◆ 地藏菩薩と恵心僧都

「比比丘女」は、平安時代の記録に見られるように、極めて古くから遊ばれていた遊びである。これが、鎌倉・室町以降、地藏信仰と結び付けられ、さらに、恵心僧都源信の創設とされて、一きわ、由緒ある遊びとするしつけられた。ここに見られるのは、子どもの遊びが「意味あるもの」として意識化され、価値の文脈にのせられていくメカニズムである。

地藏信仰が庶民の間に広まるのは、平安末期であると考えられている。そして、それが、子どもと強く結び付くのは、近世以降の動きであるらしい。子ども専用之地獄として「賽の河原」が出現するのが室町後期、それが広く一般に普及するのは江戸期に入ってからであった。その「賽の河原」で、地獄の獄卒に苦しめられて泣いている亡児を、地藏菩薩が慰め助ける。こうして、地藏菩薩は、子どもの救世主となった。とすれば、「子を捕う子

捕う」が地藏菩薩の御利益を伝えるというこの伝説は、江戸期の人々の心性に受け入れられやすかったことだろう。

それに加えて、山東京伝が強調したのは、恵心僧都源信との関係であった。源信は、周知のように、日本浄土教学を体系化し、その理論的指導者と目される人物である。『往生要集』に見られる彼の博識と論理性は、改めて指摘するまでもない。興味深いことに、人々の想像力は、この論理的な学問僧を、何故か子どもの遊びの創設者に仕立て上げようとする。踊り念仏の一遍でも、市井の聖たる空でもなく……。「取るべし取るべし、比丘、比丘尼」などと叫びながら、右へ左へと走り廻る役割が、何故、源信にふさわしいのだろうか。

地獄のイメージは、源信の『往生要集』によって、鮮やかなものとなった。つまり、彼は、地獄イメージの創設者。とすれば、地獄からの救済を遊戯化する役割も、彼に委ねられたのかも知れない。しかし、それにもまして、源信のような学識すぐれた名僧と結び付けること

で、この遊びを、いや応なしに価値あるものへと仕立て上げる。時代の意図をも見るべきではないか。子どもに関する諸々に無関心であり得ず、彼らの遊びをも単なる遊びとして放置し得ぬ心性が、漸く、人々を支配し始めていたのではなかったらうか。

気が付いたとき、人々の身近では、子どもたちが「子を捕ろ子捕ろ」をして遊んでいた。しかも、それは、いまだ大人である自分たちも遊んだことがあり、久しい昔から遊び続けられてきた、時間を含みこんだ出来事のように見える。にもかかわらず、それが改めて像を結んで、鮮明な「意味づけ」を要求している。そのために、引き出されたのが、地藏縁起であり、源信伝説であったのだ。江戸中期以降の随筆類に、くり返し顔を見せるこの「比比丘女」伝説は、こうした心性のありようを指し示して絶妙と言えよう。

(お茶の水女子大学)